八戸市

資　料　1
令和６年５月１７日
政策推進課

第2回八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議

第1回会議委員発言内容

委員発言

八戸市

❖未来像１❖　自分・まち

・「自己実現できるまち」自己実現によって、個々のウェルビーイングが叶えられるようなまち
・「未来を感じられるまち」（現実的かつ具体的なまちの未来像が求められてる）
・SDGsの「誰一人取り残さない」という理念こそ素晴らしいなと思っており、どの年代であっても取りこぼさない姿勢でありたい。
・「魅力を感じられる仕組みができているまち」
・「個人が輝けるまち」（個・人の集まりが、まちをなんとなく面白くする）（サポートするためのコミュニティ）
・「外から来る人にも優しいまち」
・「帰ってきたくなるまち」
・子どもがいるかいないに関わらず、活躍したい、自分の人生を頑張りたいという若者・女性に向けた提言にしていきたい。

委員発言

八戸市

❖未来像２❖　仕事

・「このまちで暮らせるぐらいの収入がちゃんとあるようなまち」

・「もっと創業が活発に行われるまち」（経済が伴うためのサポートがある）

・創業したい人だけではなく、会社員、フリーランスや経営者でも自己実現できるまち

・魅力的な会社がたくさんあるまち

委員発言

八戸市

❖未来像３❖　暮らし

・公共交通機関が整い「子どもが一人でもうろちょろできるまち」
・治安が良く健康に暮らせるまち
・楽しく過ごせるまち
・この先も楽しいと思えるようなことが楽しいまちだと思う。
・新しいまちの可能性。八戸駅の西エリアの新しい商業施設ができるなど、今までにない八戸の魅力が求められている。
・「カルチャーが生まれるまち」文化が生まれる＝コミュニティが生まれる。
・同世代が人が集まっているまち（賑やかな場所、店）⇒安心感、居場所
・見るだけで楽しめるまち（オシャレな店、写真映えする場所）⇒低価格、長時間OK
・日本中から注目されるまち、八戸に住んでいないが帰ってくる可能性があるまち
・「災害が起きたときに強いまち」がコミュニティをより強固につなぎ合わせることで共助の観点で災害が起こった場合の取組ができる。
・「人とのつながりがあるまち」

委員発言

八戸市

❖課　題１❖　交通

・若者たち、特に学生、小中高の子たちは種差海岸、蕪島などに実はあまり行ったことがない。
・自転車の活用がない。小中の子たちは塾に行くのすら自転車を使えない。
・移動問題（交通手段）
・地方の集まり（スポーツの練習）は親の送迎がほとんどで、こどもが親に甘える環境になっている。
・関東だと自ら集合場所に公共交通機関を使って移動するが、地方では自ら動く機会が少ないと感じる。
・そういった意味でも公共交通の充実は重要。
・八戸に来たばかりの３年ぐらいはバスを活用していた。これはバス停が近場にあったからで、近場にないと活用できない。
・子どもの習い事の送迎で親が疲弊している。
・移動面については、大きいバスが空っぽで走っているがもったいない。
・サイクリングや自転車が走りにくいまちだと感じている。
・子どもの送迎の件については、働いている人にとっては優しくない部分があると感じた。
・シンガポールに行っていたが、その間はとても歩く。毎日地下鉄を使うなど、15,000～20,000歩く。八戸にいると１日3,000～4,000歩程度。

委員発言

八戸市

❖課　題２❖　環境１

・コミュニティに入れないという若者も多い。この差は若者が入りにくい何かがあると思う。
・「健康に悪いまち」と言われたことがある。移動手段が車しかないし、歩かない。歩きや自転車での行動範囲を広げるべき。
・公園、緑、イルミネーションなどのチルい・映える場所が本当にないと思う。
・高校生と地域の若者をつなげるというコンセプトでイベントを開催したが、転勤でこちらに来て友達がいないとか、やりたいことがあって戻ってきたけどうまくいかないとか、コミュニティに入れなくて寂しいとか、困っている20代が多く集まった。
・若者の中でも困っている若者は20代が多いと感じた。
・社会人や大学生になって東京に行ってしまうと、そのまま帰ってこない方が多いと感じる。
・都会での人混みや、膨大な仕事に追われる毎日でメンタルが疲れ切ったことから帰ってきたいという若者も多い。
・都会と地方では、収入や就職先で格差があり、そういった面で都会のほうが魅力的に感じているため都会に出て行く。
・残りたいと思えるような地元の大学や就職先がないのが現状であり大きな課題。

委員発言

八戸市

❖課　題３❖　環境２

・起業する人にとってはハードルが小さいまちだと思う。
・都会で経験を積み、自己実現したい人にとっては起業しやすいのは魅力的である。
・以前「八戸は自然がないまち」と言われたことが印象深い発言だった。
・県内に残り、県内の企業に就職したい学生の割合が３割程度。学生と会社とのマッチングができておらず、収入の面や娯楽面で都会を選択している
・八戸高専にＵターンを支援する財団があり、紹介することもあるが収入等の面でマッチングできない。
・八戸には見えないネットワークがある。人伝いでつながっている。しかし、見えていないので、誰かが発しなければつながらない環境にある。
・八戸市っていうブランドイメージがないのでは。象徴的な蕪島とか種差はあるが。
・学生自体も、魅力的なまちが何なのか、そもそも地域とは何か、知らないこと、分からないことが多いと感じる。

委員発言

八戸市

❖課　題４❖　行政

・八戸市の取組では、自分は若者と女性に当てはまっていないという感覚がある。行政サービスを受けている感覚があまりなく、自分たちが満足するサービスが返っていないと感じているところが問題なのでは。
・市民活動や町内会、創業したい人向けの支援金や助成金の制度があるが制限があり使い方が難しい。
・19歳の高卒で働いている社員がいるが、行政のサービスは、恐らくこの世代向けのものではないと思っていた。
・東京で働いている20歳の子にもきっとないのだろうなとも思う。
・青森県全体だと給食費の無償化とか、医療費とか充実しているのに市として活用されていないのはもったいない。

委員発言

八戸市

❖課題と未来をつなぐもの❖

・中高から県外に出る学生が増えており、情報が多い時代だからこそ取捨選択する可能性も増えている。
・県外で学びを得た学生たちが知識を得て成長し戻ってくるというケースが実は多い。
・楽しいということを考えた時、自分の年代だと消費する楽しさより、人と人との関わりの中に楽しさを見出している。
・転勤等で初めて八戸に来た人が頼れる窓口があると、助けてもらえると思える安心感がある
・幸せな状態というのは、幸せの状態のハード面のほかに定期的にその幸せを感じられることがある状態
・八戸はコミュニティがあると思っている。例えば館鼻岸壁朝市の300店舗のお店はスタートアップのようなもの。
・コミュニティが個々に乱立しているところがあるので、相互に連携して競争ではなく共創していければ可能性があるのではないかと思う。

委員発言

八戸市

❖提　案１❖ 交通

・移動問題については、ライドシェアやシェアサイクルなど、使う側にとって安く便利に移動できる新しい交通手段があってもいいのでは。そのためには自転車専用レーンがあると良い。
・インフラとしての交通網は必要。子どもたちは自転車の利用を制限されている中で、貴重な体験の機会を失っている。
・富山の地元では、ライドシェアをしており、バス停に遠いところに住んでいる人たち用のコミュニティ移動手段、コミュニティバス的なものがあればいいのではと思った。
・歩くことでまちも見えてきたり、当然健康にも良く、歩いていて楽しいような、交通インフラのところも整備されているようなまちであるのが過ごしやすいと思う。
・道路が狭く車優先社会となっており自転車が走りやすいような環境を整備していくべきだと思う。
・移動については、空っぽの大きいバスを走らせるのではなく、小さくていいので本数を多く走らせるとか、変えられないか。

❖提　案２❖ 自分・まち

・指標で表されるのは難しいかもしれないが、何か面白いことが八戸で起こっているぞ、みたいなムーブメントというか雰囲気、が大事。そしてそれをサポートするためのコミュニティが大事。
・「自立心」や「自己実現」など夢をかなえるために子どもたちがやりたいことが、意外と親でもよく分からない。制限で実は潰されているのでは。今までの考え方も含めまちで決める制限を変えていくことが大事なのでは。

委員発言

❖提　案３❖ 環境・暮らし①

・全ての子どもの能力をもっと伸ばせるような場所（フリースクールなど）で何か新しいスキルを学べる学校や場所が必要だと思う。
・街を歩いて癒されたりインスピレーションが沸くとか、リラックスできるとか、緑がある、アートがあって癒されるみたいな。そこからは消費活動は何も起こらないけど、でも心がワクワクするものがあってもいいのでは。
・新しい魅力を作りださなければならないと思う反面、既存の魅力は外部に発信しなくてはならないが、発信で終わるのではなく、活かし方を考えなければならない。
・八戸の既存の施設の魅力に価値があると思う市民がいる一方で満足していない市民もいる。ラウンドワンのような多くの人が望んでいる施設があれば既存の施設への批判は和らぐのでは。
・個人的なイメージとして、八戸にハマる人は、自分からすごく積極的に行動に移せて、お酒を飲むのが大好きで、魚が好きで、声が大きい人が楽しいまちだなと感じる一方で、そうではないけど八戸が好きだけど真面目な話を友達とできないような人が寂しがっているという印象があるので、そういう場やコミュニティが定期的に月に１～２回とかあれば、こうした寂しい若者たちもうまくジョイントできるのかなと感じている。
・地元の富山県では、進学で富山県を離れる子に向けた「いってらっしゃい」プロジェクトがあった。
・地元から離れても、いつでも戻ってきていいよ！というメッセージを送ることで、いつでも帰って来れる空気があるようなところだと魅力的なまちだと思う。

委員発言

❖提　案４❖ 環境・暮らし②

・女性・若者と区分けしているということは、日本だとほとんどのことはおじさんが決めている、おじさんじゃない意見が出てくるということが大事という意味のターゲット設定だろうと理解している。
・経済的な問題もある家庭の方も、町内会とかも含めた支援なども必要。
・困窮家庭であったり、シングルの方だったりを含めてのサポート。
・ときめきやワクワクするようなものがあっても若い人たちはつながっていないと思う。
・ハード面はもちろん、制度としてソフトやコンテンツを民と官が力を出す必要があると感じている。
・働く人もいれば勉強をしたい人もいるというところで、そこは男女関係なく何か制度化してルール化するというのは面白いと感じた。
・市民20万人が直接的に関係ある人に発信してもらう方が、可能性、効果があるのでは。市民一人一人ができることを何かしらの政策に落とし込めたらすごい面白いことになりそうだなと思っている。
・公園の整備に市としてお金をかけたり、草取りとかも町内会で日曜の朝５時に集合してほしいと案内されるが仕事をしていると体力的にちょっと辛い。
・若い世代同士のコミュニティがあり、それを町内会とうまく連携するなど、世代を超えたコミュニティを作る仕組みができればいい。
・年齢を重ねるとすごく丁度いい環境で都会過ぎず田舎過ぎず暮らしやすいと思うが、若い時は刺激を求めると思うので、何か「ときめき」が欲しい。

委員発言

❖提　案５❖ 環境・暮らし③

・ヨーカドーの撤退の話もあるが、お店がなくなったから入るところを探すではなく、魅力的なお店が入るようにする意識が必要。
・業者とかに外注してできないのか、環境整備を市としてお金を出すなり、雇用の面とかも活用すればどうか。
・デートする場所がないのは非常に同感。
・公園もないわけではないと思うが、環境が整備されていない公園がある。
・昔は手入れされていたのが最近は草が生え放題で、誰がこういったところで遊ぶのかと思う。
・町内会をもう少し活用できないかと思う。災害時とか孤独死の発見とか、そういったところでも地域を知る、近所からコミュニティを作るのは非常に大事。
・若い世代でも自分たちの住むまちをどう良くすればいいかなど思っていることを意見する場がない。
・ハードの面で単純に映えない。なんとなく都会の方がいい、都会の方が色々あって、地方には若い世代にとっては刺激が少ない、映えがないみたいなところが単純にあると思う。
・「創業支援」による立ち上げ支援よりも継続させるための、収益が上がり自立できるような、対策や腹を割って話し合える関係性が大事では。
・地方に住んでいる人たちは、都会に行くとときめきを感じる。ときめきを感じられる新たな八戸の魅力を作ることは必要なのではないか。

委員発言

八戸市

❖提　案６❖ 行政

・納めている税金の多くが、生活困窮者へ充てられているのでは。そういった中で、全ての人が輝けるということは難しいのかもしれないが、例えば離婚した家庭への支援や目標など、そういう家庭で育った方がここで強く生きていけるようなまちにしたい。

・例えばはっちなど、何時間どの機材を使って、どの面積何平方メートル使いますみたいな作業を簡易にできれば、毎週のようにイベントなど行うのではないか。

・公共財を開くことができれば、既存のコミュニティも活性化すると思われ、新しくスタートアップ的に色々やりたい、挑戦したいという人も益々増えてくるのではないか。

・チルくなりそうな素材はあると思っていて、公園とか市の体育館とか、町内会の集会所など公共財をもう少し使いやすくできたらいい。

委員発言

八戸市

❖提　案７❖ ターゲット

・ターゲットについては救い上げられてないような方々もターゲットに入れていくというのは大事だと感じている。
・この会議における若者や女性とは。
・19歳を起点として変わっていく生き方をどうやってそこに寄り添っていくかというのを、「誰でも」ということを含めて考えていきたい。
・18歳までは同じ政策で恩恵を受けられることは考えやすく、卒業したらそれぞれ生き方が変わるため、そこに焦点を当てるのはすごく難しいと思うので、その可変性のある政策やサービスが、個々のウェルビーイングという意味では、兼行できるものを考えていくのが面白いと思った。
・若者のエネルギーをちゃんと活かしてあげられるような場や手助けする大人がいることが大事。
・大学生は、高校まで育てられた若者が、一人で自立して暮らすことになり、ある意味、これから自分らしい魅力的なことを創っていく世代であると思う。
・この世代は、ただスペック情報の羅列ではなく、魅力を言語化・ストーリー化して伝えていく必要がある。
・生き方、過ごし方、暮らし方、働き方のロールモデルをみせて、こんな人がいる、多様性・選択肢があることがわかれば、八戸市を魅力的だと感じていくのではないか。